

たかお こうじん

高尾の荒神さん

むかし かくちく こうじん
昔は各地区に荒神さんが祭られ「かまど」の神として、また農業の神として信仰されていました。

まいつき にち ちく ひと あつ
毎月二十八日には、地区の人が集まって夜おそくまで語り合い楽しんだそうです。

えどじだい はじ いのうえじんじや むなかたじんじや おか みや
江戸時代の初め、井上神社と宗像神社が岡の宮に合祀（いっしよにおまつり）され、萩原村の氏神として信仰を集めるようになり
ました。その後、開墾が進むにつれ各地に祀られていた神さまを、順次、岡の宮に合祀して、今日に至ったのです。

ごうし お
合祀にあたって起きたお話を拾って見ましょう。

せんぐう みや
(一) 遷宮（お宮をあたらしくたてて神様をまつる）をいやがる荒神さん

かくちく そうだん
各地区総代の相談で、

こうじん おか みや ごうし
「荒神さんを岡の宮に合祀しよう。」

ということになりました。

ちく さんせいはんたい おお
地区では賛成反対と大もめした結果、

「丁重に祭り、お遷ししよう。」

ということに決まりました。

身を清めた若者の奉仕で、御神体をお運びしました。ところが、道中へんなことが起こりました。今まで元気いっぱいだった青年が、急に足がだるくなり、また、ある者は腹痛を起こして大騒ぎとなり、行列は止まってしまいました。

そのとき誰言うことなく、

「これは神の祟りでなからうか。」

ということになって、神官を迎えて供物を捧げ、丁重にお祓いをしてもらいました。

ふしぎにも若者たちは元氣を取りもどし、行列は威勢よく岡の宮にとどいたということです。

以来、荒神さんの御神体かつぎを若者がいやがるようになったといわれます。

(二) 荒れる荒神さん

春と秋の荒神さんには、地区総出で、もっそ(手べんとう)を持参でお参りました。

祈禱(おいのり)に神楽(神様の前でまいをまう)や唄が奉納され、庭では若者の相撲が行われました。

その時の祈禱の中に（オンタラターカンマン、ノウマクサーマンダ・・・）というところがありますが、これを見て帰った子どもたちは、祭りがすんでも忘れられなくて、大はしやぎして遊びました。

ガキ大将が草刈り用のめご（竹かご）を取り出し長い棒を通して担ぎ、子分をひきつれて、大般若ごっこ（まねをする遊び）をしました。オンタラターカンマン・・・と大声でどなりながら、狂いまわり、疲れて、担いでいためごを思わず地べたにドスンとおろしました。その途端、めごがぐるぐる回り始めました。あわてて止めようとなりましたが止まりません。顔色も青ざめて大人を呼んで来ました。黒山の人だかりになりましたが、めごは止まりません。

古老（けいけんの深い老人）が言うには、

「荒神さんのお怒りだ。御祈禱しよう。」

ということになりました。

内野々村から祈禱師を迎えて来ていっしょうけんめいに祈ったところ、めごは鎮まり、何ごともなかったかのように静かになりました。

村人たちは、ほっと胸をなでおろしたということです。

(三) 帰って来た荒神さん

荒神さんを岡の宮にお遷しして約一年、村は変わったこともなく平和に過ぎ、暮を迎えようとなりました。

その頃、高尾大造に不幸が続ききました。その不幸は、荒神さんの移転に關した地区の組長さん方に起こったのです。

昨日まで元気に何の変わったこともなかった地区組長が突然高熱に倒れ人事不省（いしき不明）のままこの世を去ってしま

ました。

続いてBさん、そしてCさんと、一年間に四人もの指導者を失いました。

人々は、

「これはきつと荒神の祟りに違いない。」

と井上宗像神社に申し出て、分神（ご神体を分けてまつる）してもらい、元の位置にお祭りしました。

それ以来、不仕合せなことはピタリと止まり、もとの平和を取りもどし、今日にいたったといわれています。



〈山下 稔〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より